

“ふつう”への適応からユニークな参加の創造へ －韓日若者支援の現状と課題－

立命館大学 山本 耕平

はじめに

今日は、韓日の若者支援者や研究者に参加して頂き、韓日の若者支援の現状を比較しつつ、両国の課題を検討したいと思います。

今日、私がここでシンポジウムの課題として提起したいことは、次の諸点です。まず、第1に、若者達が仲間と共に育つことをどう阻害されてきたのかを探ることです。いわゆる移行期にある彼らが社会的に排除されてきた歴史的要因として競争主義が強く関連していると考えています。もちろん、競争主義が生み出した構造的諸矛盾とひきこもりを一元的に捉えることはできません。そこで、競争主義の下で、どのような若者の生きづらさが生じてきたのかを探ることが重要です。この点に関しましては、岐阜大学の南出さんの報告で深めて頂きたいと思います。第2に、なかまとの育ちあいを追及してきた居場所実践に流れる支援哲学の検討が求められます。若者が仲間と関わり、自己の課題を主体的に解決する、その集団が有する課題を仲間と共に解決する実践が居場所では取り組まれています。この居場所に流れる哲学を学ぶことが、若者支援研究の為には不可欠です。これに関しましては、佐藤さんの発言の部分で、我が国の若者支援をリードしてきたNPO法人文化学習協同ネットワークの実践哲学を報告して頂きたいと思っています。第3に、今日は、特に、韓国からニート・ひきこもりを対象とする社会的企業の支援者を招待しています。李忠韓(Akii)さんからは、Yooja Salonの哲学を報告して頂き、我が国の支援哲学と比較検討してまいりたいと思っています。第4に、今、我が国の若者支援のなかでも、アウトリーチが重視されています。そこで、今日は、佐賀から谷口さんを招待しています。谷口さんからは、佐賀でのアウトリーチの実践を通して、今後、若者支援にとって、アウトリーチがどのように求められているのかにつき報告して頂きます。

では、まず、私から、このシンポジウムの趣旨を説明する為に、いくつかの報告をさせていただきます。

1. 競争主義のなかで

国連の子どもの権利委員会は、2010年5月27日に開かれた第1509回および第1511回会合(CRC/C/SR.1509 および CRC/C/SR.1511 参照)において日本の第3回定期報告書(CRC/C/JPN/3)を検討し、2010年6月11日に開かれた第1541回会合において総括所見を採択しています。そのなかに、「教育、余暇および文化的活動(条約第28条、第29条および第31条)」があり、次のことが指摘されています。

教育(職業訓練および職業指導を含む)

70. 委員会は、日本の学校制度によって学業面で例外的なほど優秀な成果が達成されてきたことを認めるが、学校および大学への入学を求めて競争する子どもの人数が減少しているにも関わらず過度の競争に関する苦情の声が上がり続けていることに、懸念とともに留意する。委員会はまた、このような高度に競争的な学校環境が就学年齢層の子どものいじめ、精神障害、不登校、中途退学および自殺を助長している可能性があることも、懸念する¹。

所得倍増政策により、我が国が諸外国の仲間入りをし、経済大国になりました。ただ、この所得倍増政策、さらにそれに続く高度経済成長政策を支えてきたのは、いざなぎ景気を生み出す為に政策的に“会社人間”“企業戦士”“モータリッ社員”が生み出されました。

また、1970年代には、我が国は古典的貧国からの脱出を果たしたかに見え、国民は総中流意識を持つようになりました。内閣府の国民生活に関する世論調査では、自身の生活が“中流”と答えた者が1960年代半ばまでに8割を越え、所得倍増政策のもとで日本の国民総生産(GNP)が世界第2位となった1968年

¹ 外務省, 2010, 「国連子どもの権利委員会 第3回総括所見(政府仮訳)」, 外務省ホームページ, (2012年11月26日取得, http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/jido/pdfs/1006_kj03_kenkai.pdf).

を経て、1970年以降は約9割となりました²。しかし、この総中流意識は、借金(ローン)を導入し購買意欲を掻き立て、マイホームやマイカーを購入させ、その返済の為に労働者に過酷な労働を課すなかで生じたみせかけの豊かさだったのです。この見せかけの豊かさを獲得するなかで、親は、自宅に帰り子どもと情緒的に関わる時間や、地域で住民と共に子育てを含む生活を創造する時間を奪われてきたのではないのでしょうか。

この見せかけの豊かさを築き上げる為に用意されていたのが会社主義ではないのでしょうか。会社主義という言葉を最初に使用したのは馬場宏二さんです。馬場さんは、「会社主義は、資本主義的競争と共同体的あるいは社会主義的關係との精妙な結合であり、それゆえに、重化学工業の確立以降の生産力的発展にとって極度に有効な機構となった(馬場, 71-72)³」と述べています。会社主義自体は、詳細に議論しなければならない課題です。私たち若者支援との関わりでは、会社主義と超過労働勤務のなかで親が、会社や地域、家庭でどのような状態におかれてきたのかを検討しなければなりません。

さらに、学歴主義と競争主義についてです。学歴社会は、当然、所得倍增政策や高度経済成長政策と共に生じたものではありません。富国強兵の下に優秀な人材を育成する教育が必要であると考え学歴が重視されたのは明治期でした。しかし、当時は、国民の多くが高等教育を受ける経済的な条件があったわけではありません。所得倍增政策の下で獲得した「見せかけの豊かさ」は、個人の努力と能力によって成功の機会が平等に与えられるような幻想を与え、高学歴への挑戦が当然のこととなってきたのです。このような背景のもと、高学歴を獲得するための受験競争が過熱化してきました。高校進学率の推移(文部科学省)をみますと、1950年に42.5%であったものが、1960年には57.7%、1970年に82.1%となり、1975年に90%を越し、その後2012年には96.5%となっています⁴。

² 内閣府, 2012, 「国民生活に関する世論調査(平成24年6月)」, 1現在の生活について, (7)生活の程度, 図29生活の程度(時系列9)], (2012年11月27日取得, <http://www8.cao.go.jp/survey/h24/h24-life/zh/z29.html>).

³ 馬場宏二, 1991, 「第1章 現代世界と日本会社主義」東京大学社会科学研究所編『現代日本社会 1 課題と視角』東京大学出版会.

⁴ 文部科学省, 2012, 「平成24年度学校基本調査について」, (2012年11月27日取得, <http://www.e-stat.go.jp/SG1/toukeidb/GH07010201Forward.do>).

こうしたなかで、1966年版の厚生白書では「青壮年期にとって、精神衛生の問題も見のがすことができない。近年、社会生活の複雑化、オートメーション化の進行等によるストレスの増大、人間性の抑圧等の条件が複雑にからみ合って、精神の破たんを招く契機をなしている。患者調査による推計患者数でみるかぎり、精神病、精神神経症及び人格異常は、昭和30年から39年にかけて3倍弱となっており、精神障害の問題が深刻化していることを物語っている⁵⁾」という報告がなされ、また、1971年版の厚生白書では「家庭における児童の養育の担当者としての親には、育児についての自信喪失、過度の教育熱心など、さまざまな問題が混在している。(中略)一方、母親にみられるのは、家庭における母親の育児の価値を軽視して、すぐに公共の機関にたより、それが合理的であると信じているとか、過度の教育熱心とかである。児童の遊ぶ時間を奪い、学習塾でつめこみ教育をすることが、児童の人格形成のうえに悪影響をもたらし、それがひいては情緒障害、登校拒否、小児ノイローゼなどを招いていることは、児童相談所でしばしばみられるケースである⁶⁾」といった報告がなされています。

今、35歳の若者は、1967年に誕生した人達です。今日、若者支援の現場に登場している若者達の多くは、この会社主義・競争主義の下で、親と子が生きづらさを抱えてきた世代であるといえるのではないのでしょうか。我が国では1966年に学校嫌い調査、いわゆる不登校調査が始まりました。その1966年の厚生白書に「軽度の情緒障害児とは、親子同胞関係の障害により、社会適応が困難となっている児童、たとえば登校拒否、乱暴、無口、恐怖等の問題行動を示す児童である。42年3月1日現在、施設数5、収容定員250人、在籍人員129人である。この施設は、現在設置数も少なく、いわば実験の段階にあるが、問題児童の早期発見、早期治療をめざす積極的な目的をもった施設であり、近年の情緒障害児童の増加に対処するものとして今後増設する必要がある⁷⁾」といった指摘があります。

1955年と1964年を比較し、精神病、精神神経症及び人格異常が3倍弱にな

⁵⁾ 厚生省, 1966, 「厚生白書(昭和41年版)」: 20.

⁶⁾ 厚生省, 1971, 「厚生白書(昭和46年版)」: 65-66.

⁷⁾ 厚生省, 1966, 「厚生白書(昭和41年度)」: 349.

り、社会適応が困難になっている子どもの施設処遇の必要性が指摘されることには、共通の社会的背景があると考えています。また、家族類型の変化である三世代家族の減少が、子どもを育てる機能を家庭から社会へ移していったと言えるのですが、ここで考えなければならないのは、地域を構成する同年代の子どもを持つ家族の共同的な子育ても少なくなっていた事実です。

2. 会社主義・競争主義と内面との関わりについて

先ほど、患者調査では、1955年と1964年を比較し、精神病、精神神経症及び人格異常が3倍弱となっている事実が指摘されていると述べました。実は、1980年に厚生白書では、1960年代後半から1970年代にかけての疾病構造の特徴として、公害健康被害者の発生と大量飲酒者や神経症の増加が報告されています⁸。公害健康被害者の発生については、ここで述べるまでもありません。ここで指摘しなければならないのは、大量飲酒者と神経症の増加が会社主義や競争主義と、どう関わっているかです。

アルコール依存症の進行が、最初は、時たま何かの機会に飲む程度の機会飲酒から始まり、日常的に飲み、酒に強くなっていく習慣飲酒、酒がないと物足りなく感じる依存症への境界線へと進み、さらに依存症へと発展していくことは、アルコール精神医学のなかで明らかにされていることです。機会飲酒は、会社での付き合い、得意先との付き合いといった機会での飲酒を言います。さらには、会社の連帯感を高める為に必要となってくる同僚や上司との飲み会や帰宅前の飲酒が、会社を発展させる為には不可欠な付き合いであったのではないのでしょうか。アルコール依存症は、至って社会的な病であり、家族の崩壊をもたらす病であることは言うまでもありません。今日、支援の現場で出会う若者達のなかには、親がアルコール依存症であったり、アルコール依存症であった親に虐待を受けていた若者もたくさんいます。いわば、アルコール依存症の家庭で育ったサヴァイパーとしての彼らの姿がそこにあるのです。

神経症の増加に関しては、1970年代初頭に、若者たちに増えてきたのが、男性では自我漏洩症候群(自己臭恐怖症、醜貌恐怖症など)ではないのでしょうか。

⁸ 厚生省、1980、「厚生白書(昭和55年版)」：86。

笠原さんは、1978年に退却神経症が非常に増えていったと言っています⁹。これは今でいうと回避性の障害です。事実から回避している状況が増えてきたということです。つまり正業に対して非常に不安を持つ、学生なら学業、社会人であれば定職を恐れるということです。

学歴主義・会社主義の下で競争を余儀なくされる1960年代以降、個人主義が強まり、他者とのコミュニケーションを十分に確立できない社交不安や自己評価に対する不安が増大してきたのではないのでしょうか。

この高度経済成長の中で生み出された精神的次元に、孤独感のない孤独のようなものが若者の中に広まってきたのではないかと思えてしょうがありません。その特徴的なものが、“暴走族”や“ヤンキー”です。彼らは、自らの興奮を高める為に独特のファッションで身を包み、家族と共にいることを望まず、自らの手で巧妙に工夫した車を心理的安全の“基盤”としてきました。彼らには、たしかにつるむダチはいたのです。しかし、それは、仲間ではなかった。そのダチと空虚な生活時間かもしれないが共に時間を送ることができた。彼らは、つるむが創らない、つるむが残さなかったのです。ダチがいることで孤独感はなかったかもしれませんが、孤独だったのではないのでしょうか。その為に、集団のなかでの傷つけあいが生じてきたのです。

3. 韓国で今

韓国の詳細な報告は、李忠韓さん(Akiiさん)に行って頂きます。ただ、ここで指摘しておきたいことは、この競争主義・会社主義が、今、韓国で深刻になっている事実です。韓国の大学受験は非常に激しいものとなっています。入試説明会に集まるお母さんたちに、「はっきりと受験は戦争だ、そのために効率的な自己管理が必要なのだ、徹底的なプランを立てて自己管理をなさい、10年目標を定めなさい」ということでしっかりと彼らに目標を定めさせています。その中で、「(受験が)避けられないならとにかく楽しみ！」と言っています。延世大学の趙韓恵浄さんは、韓国のマネージャー・ママ(いわゆる教育ママ)の背景と特徴を次のように指摘しています。「マネージャーママは、IMF危機以

⁹ 笠原嘉, 1988, 『退却神経症——無気力・無関心・無快楽の克服』講談社。

降、韓国の企業に就職し韓国で成功することへの不安に駆られ始める親たちが“誰も信じられない”状況のなかで登場しており、そこにあるのは、適者生存原理の内面化であると指摘するのです。“子の成績表は、母の成績表”と言われるなかで、韓国社会で適応する為に、親は“受験”への全面的な投資と介入を行うのです¹⁰。」

私は、かつて、大学を終え就職を目指していた韓国の若者を対象としてインタビューを実施しました。彼らに「競争についていけない学生たちは、以後どのようなになるのか」との質問を向けたところ「彼らには、特に関心がない。自分のやりたいことをやればいい」との答えが返ってきました。さらに、「大学受験中は機械。大学入学後は人間と言われるのが韓国の当たり前姿です」との答えもありました。

この若者達は、韓国社会におけるエリート層ではありません。むしろ、大学卒業後の進路に苦慮している者でした。激しい競争のなかで就職さらには、自己の人生を勝ち取っていかねばならない彼らは余裕を失い、自己の状況を客観的に評価することが困難になり生きづらい若者として存在していたのではないのでしょうか。

今、韓国で、我が国が1960年代、1970年代に体験したことが、非常に深刻な問題として登場しているということを明らかにしていくことが必要だというふうに考えています。さらには、その一方で、韓国では若者たちを支援する1つの方法として、いわゆる社会的企業という方法の中で、若者たちが普通の会社に適応するのではなくて、新たな働き方を求める。そのような支援がいま出てきているのです。その新たな働き方がどういう形で今、保障されようとしているのかということ、考える問題提起を行っていただきたい。そういう問題提起を受けながら、我が国の政策課題が何であるのか、ということ明らかにしていきたい。さらには、我が国の若者支援の、支援者の課題、支援者が行うべき課題がいったいどんな課題として存在するのかということ明らかにしていきたいというふうに考えております。これは競争主義と若者の自殺なのですが、実は昨年、OECDの加盟国の中で、韓国は日本を超えて若者の自殺が世

¹⁰ 趙韓惠浄, ppt, 2010, “「友人の行きつけの店はどこなのか？」～敵対と孤立の時代を乗り越えて～”。

界でもっとも多くなりました。なぜ我が国や韓国でこういった自殺が多くなってきているのか、これも私はやはり競争主義の中での社会的排除が深刻な状態である結果として生じてきているのではないかというふうに考えています。

4. 孤独感のない孤独からやり場のない孤独へ

1990年当初からはじまった“失われた10年”あるいは“失われた20年”といわれる状況の中で若者たちの社会的排除が進んできました。2000年にはフリーターが増加し、ニートあるいはひきこもりが2000年を前後して非常に深刻な問題になってきました。これは、いわゆる1960年代、1970年代からの競争主義との中で深刻な課題としておこってきた問題ではないかと考えられます。

私たちが、ひきこもり支援の現場で、いじめの問題、とりわけ非常に激しい深刻ないじめの被害にある若者と出会ってきました。このいじめの問題がつい最近、韓国でも非常に深刻な問題として生じています。このあたりについて、触れられる時間があれば、Akiiさんに触れていただき、このいじめの問題と競争がどうかかわりできてきているのかということをはっきりと明かにしていただければと考えています。

最終的には私たちがどのような集団に所属していることが必要なのか、どのような集団を若者たちに与えていくことが必要なのか、どのような育ちの場、どのような暮らしの場、働く場を与えていくことが必要なのかということを提起していきたいと考えています。とりわけ、これは新たな働く場、新たな暮らしの場を若者支援に限定して捉えて、ここで提起できればと思っております。

このことを議論する時に、1990年以降、“孤独感のない孤独”から“やり場のない孤独”に若者の孤独の質が変わったのではないかとということを議論する必要があります。競争主義が若者の心に“勝ち”“負け”を明確にするなかで、自己が他者からどのようにみられるのかという不安が増強し、さらには、自己が他者に苦痛を与えるようなものを持っているのではないかと不安が強まるなかで、“やり場のない孤独”が強まっているのです。小林さん達(2002)は、「青年たちは、個の主張ばかりが問題にされて、集団への所属意識、すなわち自分が集団の一員でありそれに寄与しながら自分も集団も発展していくという

感覚なしに育ってきている。昨今の学生達は、自分がその集団にかかわり作っていくという主体性を欠くために、自分が集団に受け容れられているか・十分評価されているかのみを心配する。すなわち、自分が傷つかないようにという自己愛的な心配の結果として、回避行動やひきこもりを発生させていると思われる¹¹⁾と述べています。

さらに、彼は、社会に出ていく若者達が克服しなければならない課題の段階発達ラインを、1者関係—2者関係—3者関係—個と凝集性の高い集団—個と社会の発達として示しています。これは、若者が、安心して1人であることが可能か否か、2人の関係を豊かに営めるか否か、なんでも話せる親しい同性の友人が複数いるか否かといった1者関係から2者関係を通して、3人の関係を発展的に営むことができるか否かが大切であり、親しい友人Aと話しているとき、Aの友人らしき初対面のBが近寄ってきて、AとBが楽しそうに話している時、積極的にBに挨拶しかかわりをもつことができる関係を3者関係というが、この関係を通し、帰属している集団と調和がとれた関係が営まれているか否かの集団関係、さらに、自分のしてきたことに自信をもって生きていく、自分のしてきたことが社会に役立てる日がくるというものです。小林さん達のこの指摘は、やり場のない孤独との向き合いを行っていく若者達の歩む方向と支援について示唆するものがあるのではないかと考えます。

中西新太郎さんが『『できない』とは、たかだか能力の差にすぎなかったのに、現在の人間評価は、人たることの価値(それぞれの生の価値)にまで公然と差をつけ、そうすることで生の尊厳を根底から傷つける。ありていに言えば、生命の価値にはちがいがあり、生存権の平等などそもそも認められない、ということなのだ。競争がそうした性格を持つ以上、競争場面に立たされないための努力や他者からの批判を回避する努力が、命をかけた真剣みを帯びるのは当然であろう(中西, 2009)¹²⁾』と述べていますが、私たちが、あまりにも多い社交不安障害や回避性人格障害を生理的脆弱性との関わりで捉えると、依存を排除す

¹¹⁾ 小林正信・遠藤正臣・橋本功, 2002, 「メンタル・ヘルスの相談事例から見る学生の抱える諸問題」『信州大学教育システム研究開発センター紀要』8: 3-17.

¹²⁾ 中西新太郎, 2009, 「子ども・若者への『生きづらさ』をどうつかむか」『現代と教育 構造改革時代を生きる——子ども・若者の現在』桐書房, 78: 5-16.

る新自由主義的自立観の虚構に陥ると思います。力強い自立の強要は、競争に打ち勝つ自立の強要と排除となり、「あんな弱い子が役に立たない」という支配の論理となるのです。そこに生じるには、1者関係の不安であり、2者関係への意欲の喪失です。

5. 今、論じなければならない支援の哲学と方法

佐藤洋作さんは、「〈自己イメージ〉の未成熟状況は若者を不安に陥れるから、〈自分探し〉は切実な要求となる。競争的な人間関係を越えて相互承認的な他者と出会うことなくしては肯定的な“自己イメージ”を形成することはできず、〈自分探し〉は遂行していくことはできない。しかし、今日の学校は新自由主義的な『教育改革』によって新たな能力主義的な選別システムに再編されようとしている。早期からの『自由な選択』を通して、個性や自己実現を称揚しているように見え、実は経済界が準備する『多様な働き方』の中に子どもたちが自発的に適応していくことを求めていくようにつくりかえられようとしているのである¹³⁾」と述べています。

この自分探しの為には、宮崎隆志さんが指摘するように「矛盾し分裂した自己と向き合う辛さを共感的に受容してくれる他者との出会いによる学び¹⁴⁾」を可能とする場における他者との交流が不可欠となるのです。青年期における居場所では、1歩前を歩む仲間(ピア)との出会いがあり、その仲間や、まだ居場所に参加しづらい当事者との関わりの中での自己の状況への気づきを可能とします。おそらく、そのなかでは、現状での見かけ上の満足やあきらめへの問い掛けを行いつつ、「何とかして欲しい」から「何とかしたい」という主体的立場を獲得するのです。私は、ひきこもる若者たちを人格発達に歪みがある一群としてとらえて人格変容をめざす実践や、若者たちを育てた家族の病理性を発見して家族に責任を課すような実践は、若者や家族の解き放ちを可能とするものではないことを指摘してきました。親や大人を憎み、人との関係を紡ぐ力の獲得に課題をもつ若者たちと向き合う実践においては、若者が自身と社会に

¹³⁾ 佐藤洋作, 2007, 「コミュニケーション欲求の疎外と若者自立支援——『ニート』状態にある若者の実態と支援に関する調査報告書を読む(特集/若者の進路不安と支援)」『教育』57(12): 24-33.

¹⁴⁾ 宮崎隆志, 2004, 「協同における出会いと学び」『社会教育研究』22: 1-18

対して科学的に分析できることを目指した集団の組織化が何よりも必要となるのではないのでしょうか。その集団のなかで、支援者は、若者たちの発達を歪めてきた社会の諸矛盾について若者とともに学びあい、若者たちの暮らしづらさを生み出している社会と向き合う実践を創造する必要があります(山本, 2009)¹⁵。

韓国の Yooja Salon では、ひきこもりやニートの若者達を無重力状態から抜け出した悠々自適青少年らが“創意的からだ思考”を整えられるように支援することを目指し、彼らを理解して見守ってくれる成人あるいは機関 Network を確保しつつ持続的で安全ある情緒的網(Safety Network)をつくることにその実践目的をおいています。

Yooja Salon の中心の哲学が、教師や教育ではなく、彼らのコミュニティは、彼らを育てるといふものなのです。この哲学が、Yooja Salon の根幹にあるものでしょう。つまり、同年齢集団による育ちあい、現在、残念ながら我が国では廃れてしまった集団主義教育が目指していたものが、仲間と共に育ち、仲間と共に自己の能力と人格を陶冶し、社会の主体者となることでした。今、若者達が向き合っているさまざまな課題の重大さ—いわゆる生きづらさと表現される事実—と向き合う力を獲得する為に、若者支援の根底を流れる哲学としてこの考えが必要ではないのでしょうか。

さいごに

若者達が、その生きづらさを克服するためには、同様課題と向き合う仲間とともに主体的に自己の課題に向き合う集団が必要です。その集団で、自らの人生と向き合い、生きる意味を確認しながら社会に参加するために不可欠な存在である仲間とともに、自身の人生の課題と向き合うことができる空間に参加し、同じひきこもりと向き合ってきた仲間とともに、制限されていた自己を解き放つ実践を行う必要があります。現在、若者支援者として活躍する1人の女性は、「今から思うと、高校二年の時は誰ともつながってなくて孤独な日々だった。でもその後のいろんな経験を経て、たくさんの人に助けられ、支えられ、見守

¹⁵ 山本耕平, 2009, 「若者のひきこもりと精神保健福祉課題としてどう同定するか」『立命館産業社会論集』45(1): 15-33.

られながら今という“日々”を送っている。おだやかな日々よりも、多くの矛盾や葛藤・しんどさを感じる日々のほうが、私は生きているなあって実感する」と語ります。この語りにみる“多くの矛盾や葛藤・しんどさを感じる日々”を居場所実践がどう創造するのが問われるのです。

以上の点から、後半のディスカッションのなかでは今、私たちに課せられている、つまり若者支援者に課せられている研究課題や実践課題を少し整理するような形にもっていければと考えています。